

選択講義「具体的援助方法」

# 問題行動の軽減の方法

総合教育センター  
特別支援教育室

## はじめに

### 1 障害幼児の成長・発達のための基本原理

障害の有無、障害の種類・程度のいかんにかかわらず、子どもはすべて集団の中で、そして遊びを通して発達すると考えられます。障害幼児の教育においては、この基本原理が十分に取り入れられなければなりません。一般的な豊かな集団生活経験と、障害の種類・特性に応じた治療や訓練がともに必要です。

しかし、この両方を適切に与えることは困難であることが考えられます。当面の課題としては、集団生活の場をすべての障害幼児に保障することがあげられます。その中で、障害幼児の発達を高めるためのより望ましい、効果的な指導のあり方の追求と実現に努める必要があります。

### 2 問題行動のとらえ・及び指導

#### (1) 問題行動とは

いっばんに教育や子育ての場面での指導・援助上の困難を引き起こす行動にたいして用いられることが多い。逸脱行動や、パニック、汚い言葉をしばしばいうことなどが、その一例である。  
「障害児教育大辞典」旬報社

#### 問題行動をとらえる視点

- ・誰にとっての問題行動なのか
- ・問題行動は発達要求のあらわれ(子どもからの**サイン**)

#### (2) 問題行動の指導

問題行動の指導を考える際に、最初におさえるべきは、誰にとっての問題であるかという点です。教師や大人にとっての「問題」の側面だけでなく、子どもの発達にとっての「問題」(課題性といいかえる意味での)を明らかにする必要があります。例えば、子どもが理解できない困難な課題を大人が提示しておいて、子どもがそれから逸脱した際に、それを子どもの側の問題行動としてしまうことは、問題行動の本質を隠してしまうことになりかねません。まず大人を含め、環境の側が問題行動を生み出す要因をふくんでいないか、という視点で自らをとらえなおすことが重要です。

次に、「問題行動は発達要求のあらわれ」ととらえ、その中に子どもが内面的にかかえている発達要求と、それが実現できないことでの周りとの軋轢が問題行動となってあらわれている姿を、その基底に読みとることが大切です。このようにとらえることは、問題行動の消去のみを指導の目標にするのではなく、発達要求を実現することで、問題行動を必要としない内面を形成することを目標とする方向性を提示することにつながります。

## 指導にあたっての考え方

### 1 行動療法的アプローチの原理

行動療法的アプローチとは、行動の学習される理論に基づいて、望ましい方向に変える治療教育を総称して呼ばれます。(行動変容法、行動応用分析)

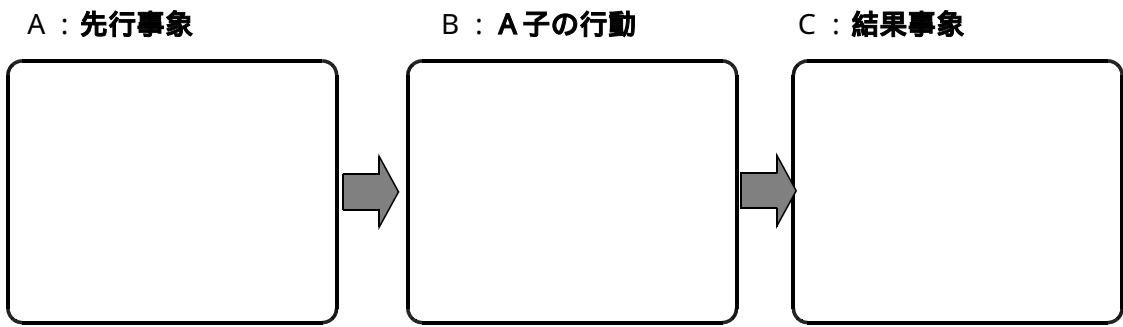
#### (1) 行動のABC

行動のABCとは「子どもがなぜそのような行動を学習するのか」を3つの段階に分けて理解しようとする考え方です。ABCは、次の意味です。

- A：先行事象 (Antecedents)：**子どもの行動する前の事柄
- B：行動 (Behavior)：**子どもが行ったり言ったりすること
- C：結果事象 (Consequences)：**子どもが行動した後の事柄

次の事例を「行動のABC」で整理してみましょう。

A子は、お母さんとスーパーに行きました。A子は、お菓子売り場で好きなお菓子を見つけて「買って、買って」と言い張り、そこを動かそうとしません。あまりのしつこさに、お母さんは、根負けをしてお菓子を買ってあげました。最近では、スーパーのお菓子売り場に行くたびに、A子は、「買って、買って」とパニックを起こすようになりました。



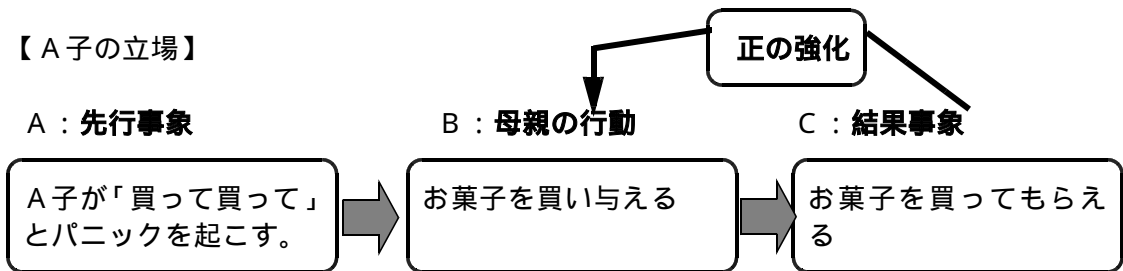
(2) 行動の3原則  
行動の3原則とは、結果事象に着目し、結果と行動の関係をまとめたものです。

**原則1：強化の原理**  
子どもは、ある行動にその子にとって良い結果が伴うと、またその行動をするようになる。  
**原則2：消去の原理**  
子どもは、ある行動にその子にとって良くも悪くもない結果が伴うと、しだいにその行動をしないようになる。  
**原則3：罰の原理**  
子どもは、ある行動にその子にとって悪い結果が伴うと、しばらくその行動をしないようになる。

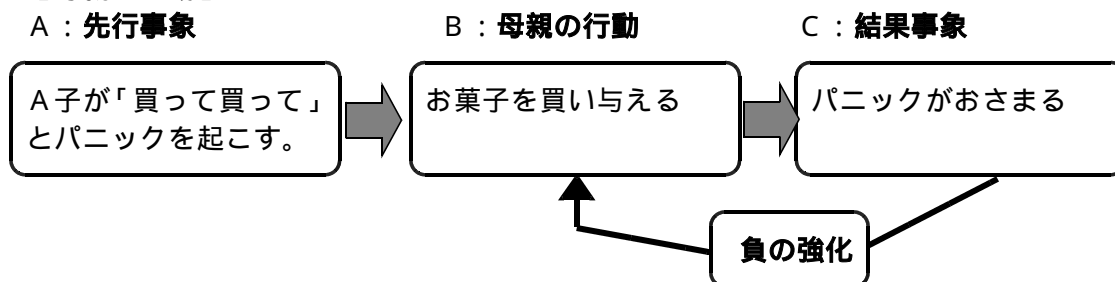
一般的に、「原則3：罰の原理」を用いることは、他へのマイナス的影響が大きいため選択肢から除かれます。  
強化の原理  
強化の原理には、2種類あります。

何かをした後で、その人物にとって良いこと（正の強化）が与えられる。  
何かをした後で、その人物にとって嫌なこと（負の強化）が取り除かれる。

先のA子の事例では、A子にとっては「正の強化」が、母親にとっては「負の強化」が行われていることとなります。



【母親の立場】



指導場面に生かしてみると・・・

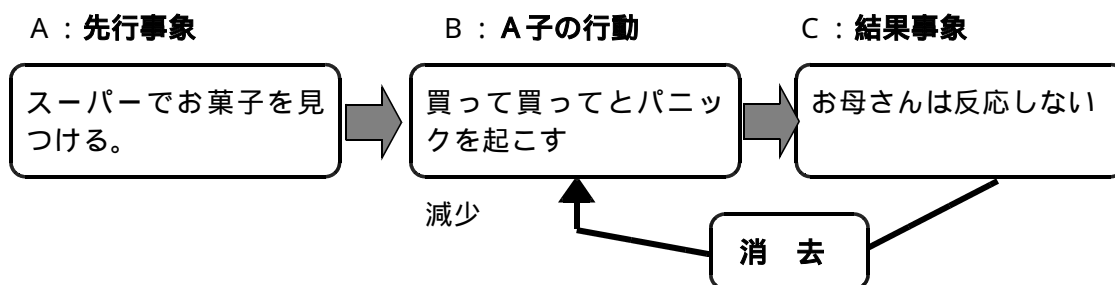
「問題行動が繰り返されて困る・・・」このようなケースの場合、問題行動の後の対応が、結果として更にその行動を引き起こす結果となっていないか（強化をする結果になっていないか）を検討してみる必要があります。

消去の原理

消去は、それまでにその行動が強化されてきたタイプによって2通り考えられます。

正の強化によって獲得された行動の消去

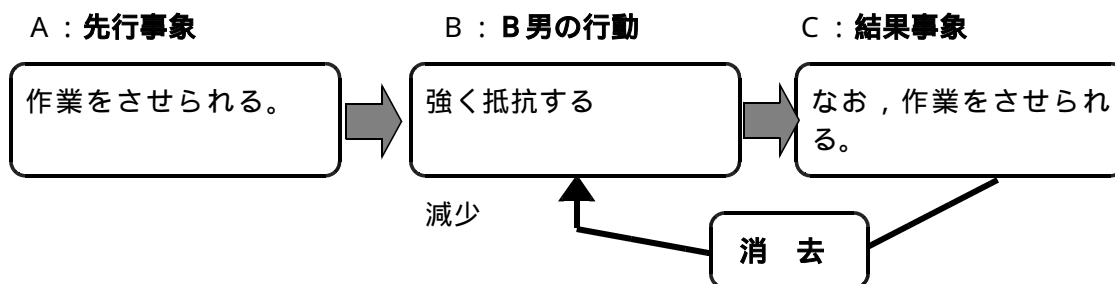
ある行動の結果として、与えられてきた正の強化が与えられなくなるために起こるものです。



負の強化によって獲得された行動の消去

ある行動の結果として、これまで行われてきた負の強化が、行われなくなるために起こるものです。

B男は、先生の指示を聞きません。机に向かっての作業をさせようとするすると、金切り声をあげて床にひっくり返るなどの強い抵抗を示します。こうなると、どうしようもなくなり、作業をさせることはできなくなります。



消去による行動減少には2つの特徴があります。

- ・行動が消えるまでに比較的長時間かかること
- ・それまで習慣となっていた行動は、消去の初期段階に一時的に頻度の増加や激しさが見られる

こと

### 指導場面に生かしてみると・・・

「バカ」「ウンチ」などの言葉をわざと言うことで、先生の注意を引こうとしているA君に対して、その言葉を言っても反応しないことにしました。すると、A君は、更にその言葉を言って先生の気を引こうとしました。しかし、それでも先生が反応しないので、数日後には、そうした言葉は減少をしていきました。

## 2 その他の指導技法 全強化と間欠強化

強化には、毎回強化が与えられる全強化と何回かに1回だけ強化される間欠強化の2種類があります。一般的には、行動が定着するまでは、全強化を行い、行動が獲得された後は、間欠強化を行う方が、全強化だけを行うより定着が良いとされています。また、間欠強化を行うことで、強化されなくなってもその行動の減少傾向は小さいとされています。

### 指導場面に生かしてみると・・・

登園後、カバンをロッカーにしまわないB君に、しっかりしまったらシールを貼る取組をしました。取り組み始めた当初は、できた日には、毎回シールを貼りましたが、1ヶ月程度取り組み定着が見られたので、2日に1回の割合でシールを使うようにしました。その後、シールを使う割合を減少させていき、最後にはシールを使わないでも自分からカバンをロッカーにしまうことができるようになりました。

### 弁別と般化

ある特定場面で、ある行動に対して一貫した結果を伴うことによって、特定場面ではほとんど必ずその行動を示す（示さない）ことを、先行事象を弁別したと言います。先のA子の事例では、A子は、スーパーを弁別したことになります。一方で、ある特定の場面での行動が強化（消去）されたために、別の場面でもその行動をする（やめる）ようになることを般化したと言います。

自閉症や知的障害のある幼児の場合、一般的に学習したことを他の場面に般化させることが難しいケースが多くあります。般化させる場合には、次の2点が大切になります。

- ・先行事象を互いに近似させ、般化しやすいようにする。
- ・般化した行動も一貫して強化する。

### 指導場面に生かしてみると・・・

牛乳を飲みたがらないC君に、コップにメモリを付けて少量から飲ませる取組を始めました。その結果、園では次第に飲める量が増えてきましたが、家では相変わらず飲みません。そこで、家でも園での取組と同じようにメモリを付けたコップを使いながら、園で取り組んでいる量を飲むようにしました。その結果、家でも飲めるようになってきました。

## 具体的な指導法

問題行動への対応は、その行動の起こった後の対応が重要であることを先に述べました。同時に、問題行動が起きることを予防することも欠かすことができない取組です。このように、問題行動に対しては、予防とその後の対応の両面から考えていくことが必要となります。

1 問題行動が起こった後の対処法

(1) 原因を探る

どの問題行動にも、原因が存在します。問題行動を取り除くことを考えた場合、まず、原因をつきとめ「どうしてその行動が起き続けるのか」を明らかにする必要があります。

先に述べたとおり、問題行動の続く原因の多くは、「行動」と「その直後の状況」の関係が大きいとされます。具体的には、「望んでいるものごとを獲得」する場合と「望まないものごとから逃れる」場合の2通りに分けることができると考えられます。問題行動の直後に、本人が「何らかのものを結果的に手に入れた」か「何らかのものごとから結果的に逃れた」かによって、図1のように原因が分かれます。また、次頁表1は、問題行動の原因と例をまとめたものです。

図1 問題行動の原因の分類

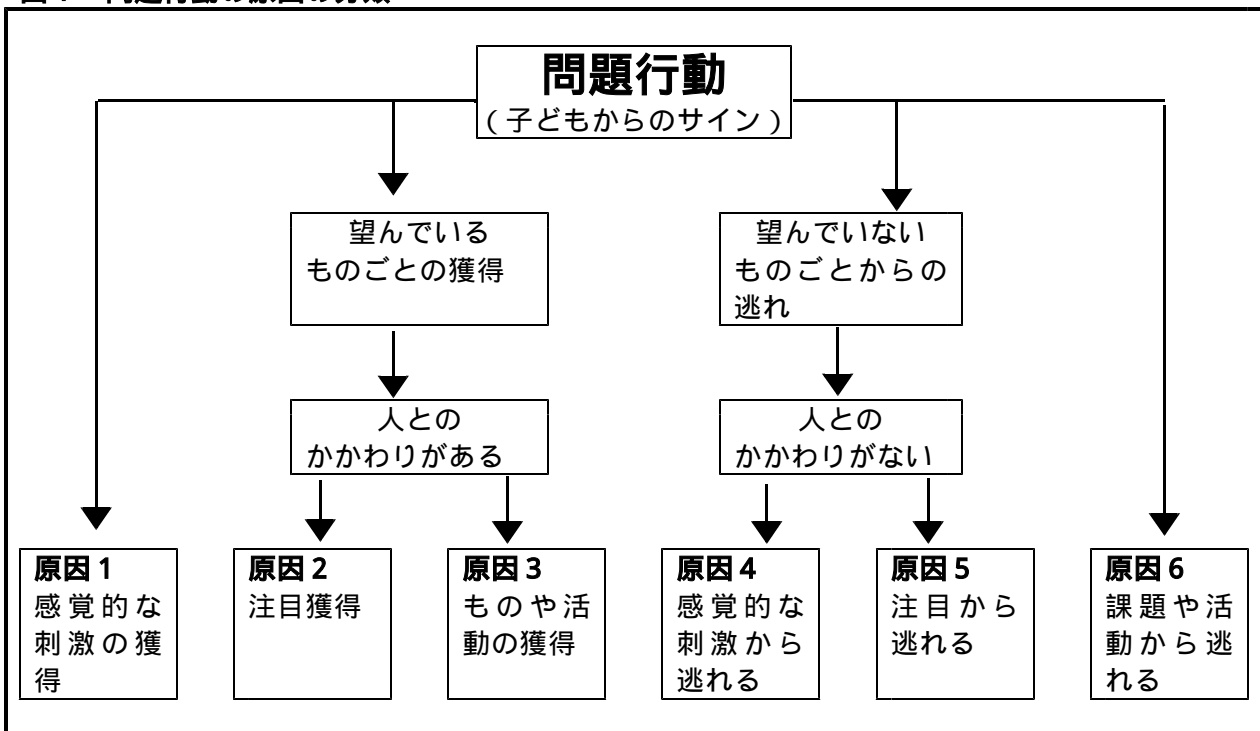


表1 問題行動の原因と例

原因	具体的な例	
原因1 感覚的な刺激の獲得	独特の皮膚感覚（痛み）を得る	自傷行為
原因2 注目獲得	大人の叱責（注目）を得る	食事中に食器を投げる
原因3 ものや活動の獲得	おもちゃを得る	おもちゃ売り場で大泣きする
原因4 感覚的な刺激から逃れる	怖いものを見ないですむ	嫌いな病院に近づくと大泣きする
原因5 注目から逃れる	他者との会話を避ける	休憩時間になるとトイレにこもる
原因6 課題や活動から逃れる	嫌いな行事を避ける	遠足の前にリュックを隠す

(2) 問題行動直後の行動を変える

原因が推定されたならば、その原因を取り除くことを考えます。そのためには、問題行動の起きた後の対応を考えます。原則は、「望んでいるものごとを獲得」するために起きている場合は、その行動を起こしても獲得ができないように、「望まないものごとから逃れる」ために起きている場合には、

その行動を起こしても逃れられないようにすることが基本になります。表2は、その具体例です。

表2の中の「新たな対応」では、「追いかけない」「注意や叱責をしない」という方法をとっています。これは、「無視」という手法です。「無視」とは、子どもの存在を無視するのではなく、子どもの行動に社会的強化を与えないという手続きをさします。効果が表れる場合まで時間がかかること一貫性が崩れると行動が改善されない特徴があります。

**表2 「問題行動直後の行動を変える」具体例**

問題行動 の概要1	授業中に教室を抜け出す。担任は追いかけて「もう二度と教室から抜け出さない」と約束をさせ謝らせるが、何度となく繰り返される。	
原因	現在の対応	新たな対応
注目の獲得 - 担任の注意や指導を得たい	<ul style="list-style-type: none"> <li>追いかけてつかまえる。</li> <li>もうしないと約束し謝らせる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>追いかけない</li> <li>注意や叱責をしない</li> <li>* 追いかけていけない状況でも、注意はせずに教室に戻すだけにする。</li> </ul>
問題行動 の概要2	掃除の時間になると逃げる。水遊びをして服を濡らすので、着替えをさせていると掃除をしないで終わってしまう。	
原因	現在の対応	新たな対応
課題や活動から逃れる - そうじをしたくない	<ul style="list-style-type: none"> <li>連れ戻す。</li> <li>服を着替えさせると掃除ができない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>時間に遅れても掃除をさせる。</li> </ul>

その他にも、次のような方法もあります。

**タイムアウト**

問題行動をしたら、数分間何も無い部屋に一人にするなど退屈な状態にすることを言います。強化子から切り離すという考えを強めたものです。

**指導場面に生かしてみると・・・**

**パニックへの対応**

自閉的傾向のあるD君は、かんしゃくを起こすと友だちを叩いたり、机を倒したりなどの行動が見られます。そこで、そうした状態になると、いくら注意してもさらに行動がエスカレートしてしまい手が付けられなくなります。そこで、かんしゃくを起こしたら、誰もいない部屋でしばらく一人にすることにしました。そうすると、以前より早く元に戻ることができるようになりました。さらに、かんしゃくを起こしそうな気配があれば、いち早く静かな部屋に行くことで、回数も減ってきました。

**代替行動の指導**

問題行動を指導する際、その行動に変わる行動（両立できない、同時に行えない）を強めたり、より良い行動を指導したりするものです。

(例)

- ・いやなことがあるとかんしゃくを起こす
  - 「いや」と言うことを教える
- ・常に指しゃぶりをする - 両手で遊ぶ玩具や遊具で遊ぶ機会を多くする。
- ・教室を走り回る - 静かに遊ぶ遊びを教え、その行動が表れたら強化子を与える。

**指導場面に生かしてみると・・・**

**全校朝会等での指導**

小学2年生のE君は、全校朝会や学年朝会の時になると、周囲の友だちの服を引っ張ったり、体をたいたいたりなどのちょっかいをし、落ち着きのなさが目立ちます。本人はもちろん、周囲への影響が大きいので、E君との話し合いの上、次のような取組を始めました。

- ・ポケットの中にゴムボール（２個）を入れ、集会の間はポケットの中であれば触って良いこと
- ・周囲の友だちへのちょっかいはしないこと

友だちへのちょっかいが無い場合は、賞賛するとともに、うまくいくことが続いてきた頃を見計らってボールを１個にしたり、ボールの大きさを小さくしたりなど、段階的にボールへの依存を取り除いていきました。その後、体を揺すったり、よそ見をしたりなどの落ち着きの無さは残りましたが、ボールが無くなっても友だちへのちょっかいはほとんど見られなくなりました。

## 2 問題行動が起きることを予防する対処法

問題行動を減らすためには、「その問題行動を起さない状況をどのように作り出すか」が重要です。その際には、次の観点からの検討が必要となります。

### （１）問題行動が起こる直前のきっかけ（起こらない場合の直前のきっかけ）を特定する

問題行動が起こる場合、いつ、どこで、だれと一緒にいる時、どのような活動が原因で起こるのか、予測できる要因を特定することで、その後の指導に役立つことができます。同時に、問題行動が起こらない状況はどのような状況なのかを特定することも指導を考える際、大変有効です。うまくできる状況は、問題行動が例外的に解決している状況と見ることができます。この例外的な状況を増やしていくことで問題行動の解決に役立たせていくことができます。

直前のきっかけを特定する際の観点

時間

いつ起きて、いつ起こらないのか

場所

どのような場所で起こりやすいのか

活動

特定の活動が起こりやすさと関係しているか

人

特定の人と一緒にいる時に起こりやすい傾向があるか

### （２）直前の状況（先行事象）を変える

問題行動に変わる新しい行動を確実にスムーズに引き出すためには、先行事象である「直前の状況を変える」ことが大切になります。先の直前のきっかけが特定できれば、そのきっかけを起こさないように次の４つの観点から検討します。

時間 : 直前の状況の時間を変更する

場所 : 直前の場所を変える，現在の場所に少し手を加える。

活動 : 直前の状況に新たな活動を追加し，今まであった活動をやめる

人 : 対応する人や人のかかわり方を変える

## 3 A子の事例への適応

先のA子の事例をこれまでのことから、次のように取り組みを設定しました。

A : 先行事象

B : A子の行動

C : 結果事象

スーパーのお菓子売り場でお菓子を見つける。

買って買ってとパニックを起こす

お母さんはお菓子を買って与える



## 【新たな取り組み】

### 直前の状況の変更

- ・スーパーを変える
- ・お菓子売り場を通らない
- ・「お菓子を買わない約束をする」

### 当面の目標

「買って買って」と言ってもパニックは起こさない。

### 直後の状況を変える

- ・「買って」と言っても反応しない
- ・パニックを起こさなければほめる。
- ・ごほうびを与える。

#### 4 間接的な状況を変える

問題行動を改善する直接的な指導ではありませんが、間接的な指導として、「場の構造化」「日課の提示」「コミュニケーションの改善」等を行うことで、問題行動が軽減することがあります。問題行動を起こす本人にとって理解できない状況をなくし、安定して活動できる状況を整えることで問題行動の起こる可能性を低くしようとするものです。

##### 「場の構造化」

「指示が通りにくい」、「活動が長続きしない」等の課題を抱えている子どもの中には、何をどの程度、どのようにすればよいか十分に理解できていないために先のような行動になってしまっている可能性も考えられます。そこで、活動を場所毎に区分したり、場所と活動内容とを結びつけたりすることによって、無関係な活動が入り込む余地が少なくなり、活動がスムーズに行えます。また、課題に取り組む場所、遊ぶ場所など用途によって場所を決めるなどの環境のレイアウトを工夫し、活動場所や教室自体を構造化することも考えられます。

#### 指導場面に生かしてみると・・・

- ・自分のロッカーや靴箱が判別できない子どもに特定の色のシールを目印として貼ることで混乱を少なくさせる。
- ・「絵を描く 切り取る 貼る」などいくつかの作業を伴う活動をする際に、それぞれの活動毎に取り組ませる机を変えさせるとともに、その机の上に必要な用具のみを置いておく。
- ・ホールや園庭など広い場所に行くとフラフラしてしまう子どもに対して、集合の目印になるコーンを置いて、その場所に座ることを意識付ける。

##### 「スケジュール等の視覚化」

1日のスケジュールや1時間の活動内容を文字カードや絵カード等で提示をして、どのような流れで活動が進むのか見通しをもたせるようにします。

##### 「コミュニケーションの改善」

問題行動を起こす子どもの中にはコミュニケーション能力が低いために、自分の意思をうまく伝えられなかったり、相手の意思を理解できなかったりすることが原因で問題行動につながるケースも考えられます。自閉症の子どもが言語能力の向上とともにかんしゃくを起こす回数が減少することからも分かるように言葉の発達と行動とは密接な関係があります。そこで、問題行動を起こしがちな子どもの指導においては、次のような手立てを検討し、コミュニケーションの改善を図ることが有効です。

- ・絵など視覚からの情報を利用して理解しやすい状況を作る。  
(ことばの指示に加えて視覚的な手がかりを)
- ・子どもの発達段階に応じたコミュニケーションの取り方を考える。

#### 指導場面に生かしてみると・・・

集団での指示の後に必ず個別的な指示を行うようにする。  
実物、絵、写真を用いながら説明する。  
初めて行う行事に適応が難しい場合、前年度のVTRを視聴させて見通しをもたせる。  
問題行動が行われた場合、本来どのような行動をとるべきだったのかを具体的に教える。

問題行動を回避するための約束事を「キーワード」で提示する。

問題行動な起こりがちな場面をシミュレーションし、どのような行動をとるべきかを意識化させる。

(例) F君は、ブランコ遊びが大好きですが、いつもブランコを独占してしまい、友だちとトラブルを起こします。トラブルを起こした後は、「もうしない」と反省しますが、あまり効果がありません。そこで、遊びに行く前に、「もし、だれかがブランコをしていたらどうするか」、「だれかにゆずってと言われたらどうするか」等、実際に起こりがちな場面をシミュレーションするようにしました。こうした指導を繰り返し行うようになってから、トラブルが減少してきました。

上記のように「こうすればこうなる」という見通しをもつこととトラブルの回避とは関連があります。見通しをはっきり意識化できることによって、トラブルを回避できます。この見通しをもつことにも言葉の力が関係しています。

## おわりに

子どもを理解すること

理解する：Understand……「下に立つ」

## 参考資料

- ・「発達障害児者の問題行動 - その理解と対応マニュアル - 」  
志賀 利一 エンパワメント研究所 2000年
- ・「子どもの視点で考える問題行動解決支援ハンドブック」  
ローバート・E・オニール他著、茨木 俊夫監修 学苑社 2003年
- ・「ADHD、LD、HFPPD、軽度MR児保健指導マニュアル - ちょっと気になる子どもたちへの贈りもの - 」  
加我 牧子他著、小枝 達也編集 診断と治療社 2002年
- ・「障害児教育大辞典」  
茂木 俊彦他編集 旬報社 1997年

